

# 門

平安京

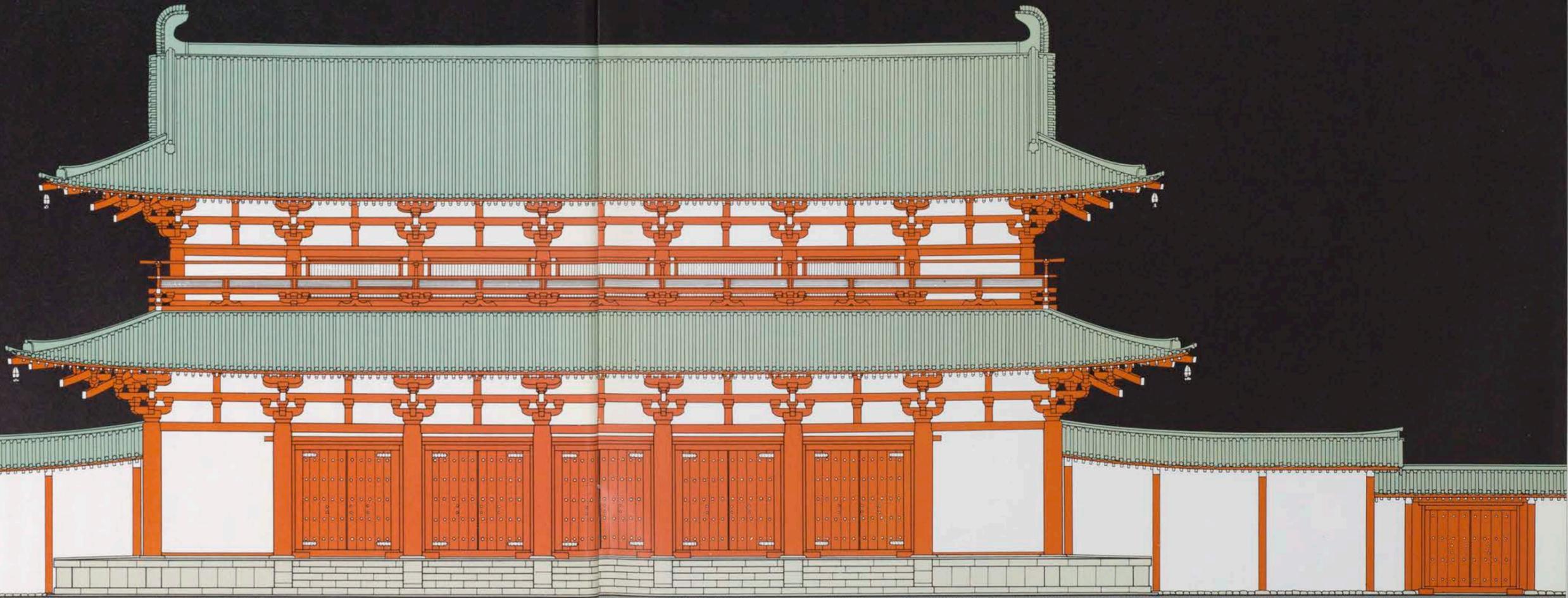
## 羅城門復元の試み

大林組プロジェクトチーム

# 城

平安京の羅城門について語りつがれてきたことは多い。平安京という華麗な都全体を代表する門であり、その豪壮な姿が史料や伝説の中で脈うっているがその全容は今日、まだ明らかにされていない。京のシンボルとしての門。しかもおよそ日本に実在した門の中でもっとも知名度の高い。そして日本では最大級の門である羅城門。大林組プロジェクトチームは限られた資料をもとにこの羅城門復元に挑戦を試みた。

# 羅



## 平安京と羅城門

全くあわただしく平安京への遷都が進められた。延暦十二年(西紀七九三年)の正月十五日に、桓武天皇の命を受けた藤原小黒麻呂達が新都の予定地を見分けて以来、翌年の十月二日、車駕遷都新京と「日本紀略」に記述されている遷都の日まで、わずか二年にも満たない。この間、新都の諸門が造営されたことや、長岡京の建物を解体し材料として運んだ事実が「類聚国史」や「拾芥抄」に見られる。

平城京から長岡京に都が移されてから十年しか経っていない段階で、なぜかくもあわただしく遷都しなければならなかったのか、これを論ずる余裕はこの稿には無い。だが、新都造営の理由がどうであれ、この地は一千年を超す長い間ほとんど日本の首都であり続けた。

ところで、平安京の規模や位置も時の流れの中で変遷していくのだが、造営当時の状況は「九条家本延喜式」によって、そのおおよそを知ることができる。全体規模は南北五・三、東西四・五の矩形。北正面に宮城を配し、その入口である朱雀門より真南へ朱雀大路が走って都を左右両京に分かっている。さらに大路により南北に十二、東西に各四の坊割りを行い、各坊は小路により町割りがなされていた。平城京と同様、唐の長安にならったものである。

都の脊柱をなす朱雀大路は、幅二十八丈(約八十四m)の堂々たる広さで、明らかに道としての必要幅を超えていた。都の広場としての性格を持っていたのではな

に面した唐橋花園児童公園付近にはほぼ間違いないものと思われる。

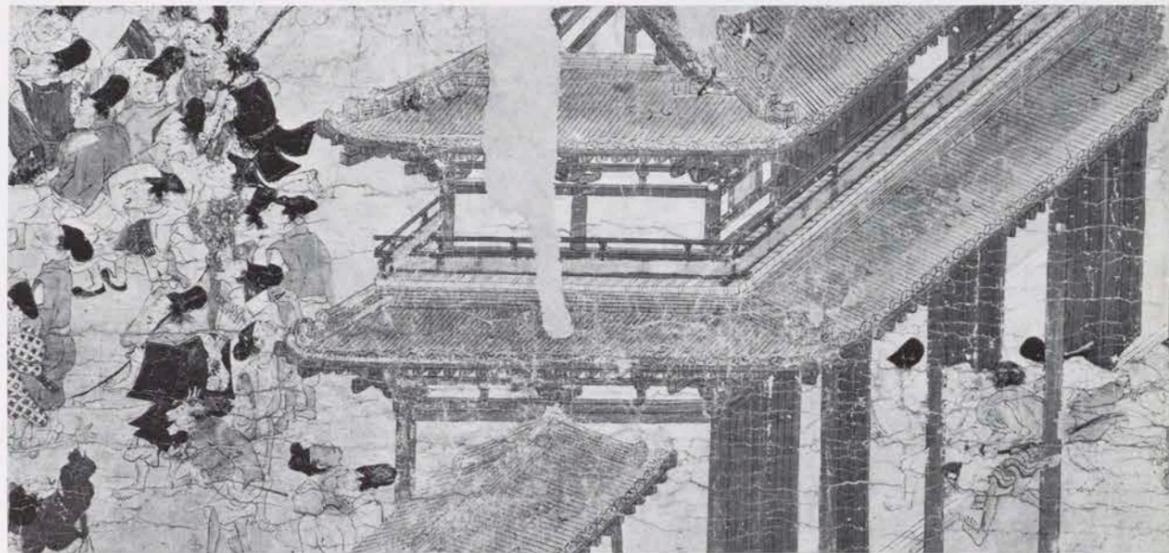
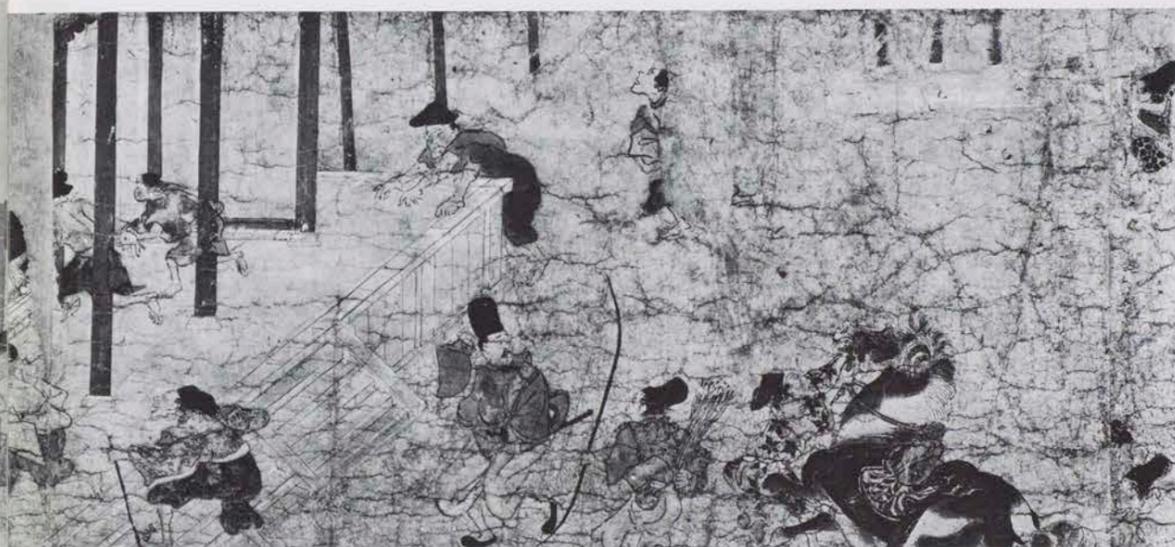
平安京造営と同時に建立された東寺の諸建築は、後世に建て替えられてはいるものの、位置は平安創建時のままである。このため、各門やそれに繋がる築地塀は、今回の推定に役立っている。また、西寺に關しては、現在に至るまで基壇跡が残っており、しかも昭和三十五年に西寺児童公園内にプールが造られたことが機縁となって、発掘調査が進み、昭和三十七年には食堂、南大門、金堂及び回廊の位置と規模が判明した。これにより、平安京の中心線が、さらには平安京造営尺が〇・二九九mであったことなどがわかったのである。(京都市埋蔵文化財年次報告書より)

なお、羅城門の東西中心線は、東寺南大門に接続する築地塀(九条大路の北端より南へ「延喜式」による九条大路広十二丈)をとって求めることができる。

このように推定された羅城門の位置が、唐橋花園児童公園に接した民家のある場所に当たる。この地点の発掘は民家があるため行われていないが、周囲は過去三回にわたり発掘調査がなされている。しかし、その調査によると、平安時代の瓦片が数種出土したのみで、羅城門の遺構らしきものは発見されていない。

## ② 羅城門の規模

羅城門の遺構が発掘されていない現在、その規模については既存の史料より推定せざるをえない。このため、羅城門の規模について触れている史料を拾うこと



かろうか。そしてこの朱雀大路が都の南端、九条大路とぶつかるところに、朱雀門と相対し、雄大な都の正門が聳えあっていた。羅城門である。

羅城門の左右には、東・西両寺が双翼の形をとり、南へは鳥羽に通じる作道が開けていた。遠く西国からの朝貢使、命がけて波浪を越えてきた唐からの使者達が最初に目にした平安京は、白壁に丹塗りの門柱、陽に輝く緑釉の鸚尾(大棟の両端にとりつけた装飾で、後世「やちほこ」等に発展した)をのせた二重閣七間の羅城門、さらに左右に東・西両寺の緑釉瓦の五重の塔といった壮大にして華麗な光景であったと思われる。都を訪れた人はまずその入口で、律令国家体制の揺るぎなき、天皇の威風に圧倒されたに違いない。羅城門は、まさに平安京のシンボルであった。

## ① 羅城門の位置

「延喜式」によると、都の南端を東西に走る九条大路(幅約三十丈)のさらに南に、羅城外大路(幅約二十丈)があった。この両大路に挟まれて、築地塀——羅城門があり、都を内、外に分けている。羅城門は、この羅城の中央に位置していたのである。

それでは、これは現在の京都市では、いったいどの辺に当たるのだろうか？

平安京の発掘があまり進んでいない現状では、その正確な地点を求めることはできない。したがって東寺や西寺の遺構「延喜式」等の史料をよりどころに推定することになるが、おおよそ東寺の西方、現在の九条通り

から始めた。

「大内裏抄」(室町中期)二重閣七間

「天文本拾芥抄」(室町末期)二重閣七間

「版本拾芥抄」(桃山時代)二重閣七間

「大内裏図考証」(江戸後期)二重閣九間

「平安通史」(明治時代)二重閣九間

いずれも羅城門が倒壊してからの記述であり、しかもその内容が二通りに分かれている。間口を七間とするか、九間とするか。一般的には古代の古い史料の方が事実に近いと考えられるのだが、それに確証は無い。

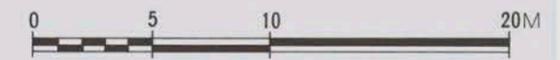
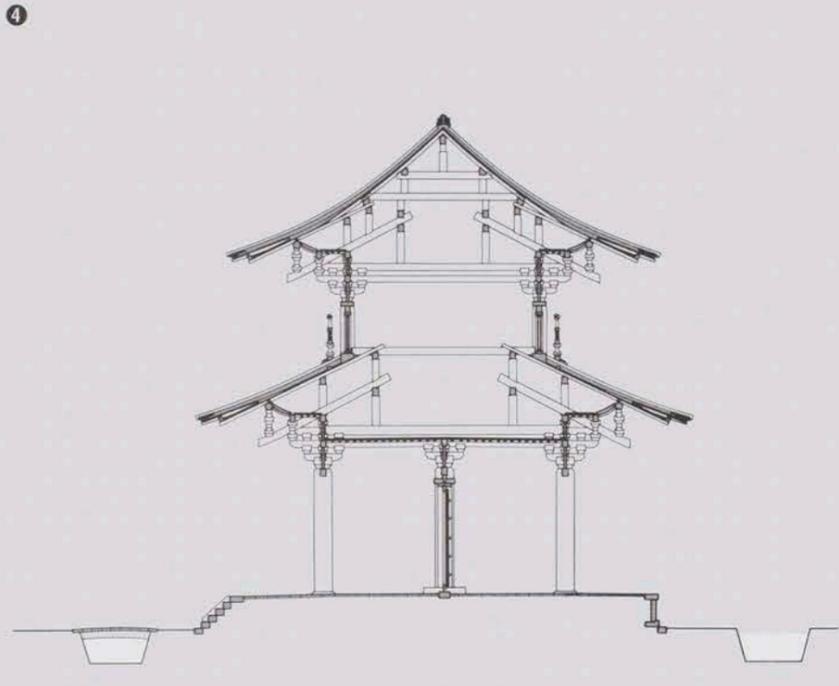
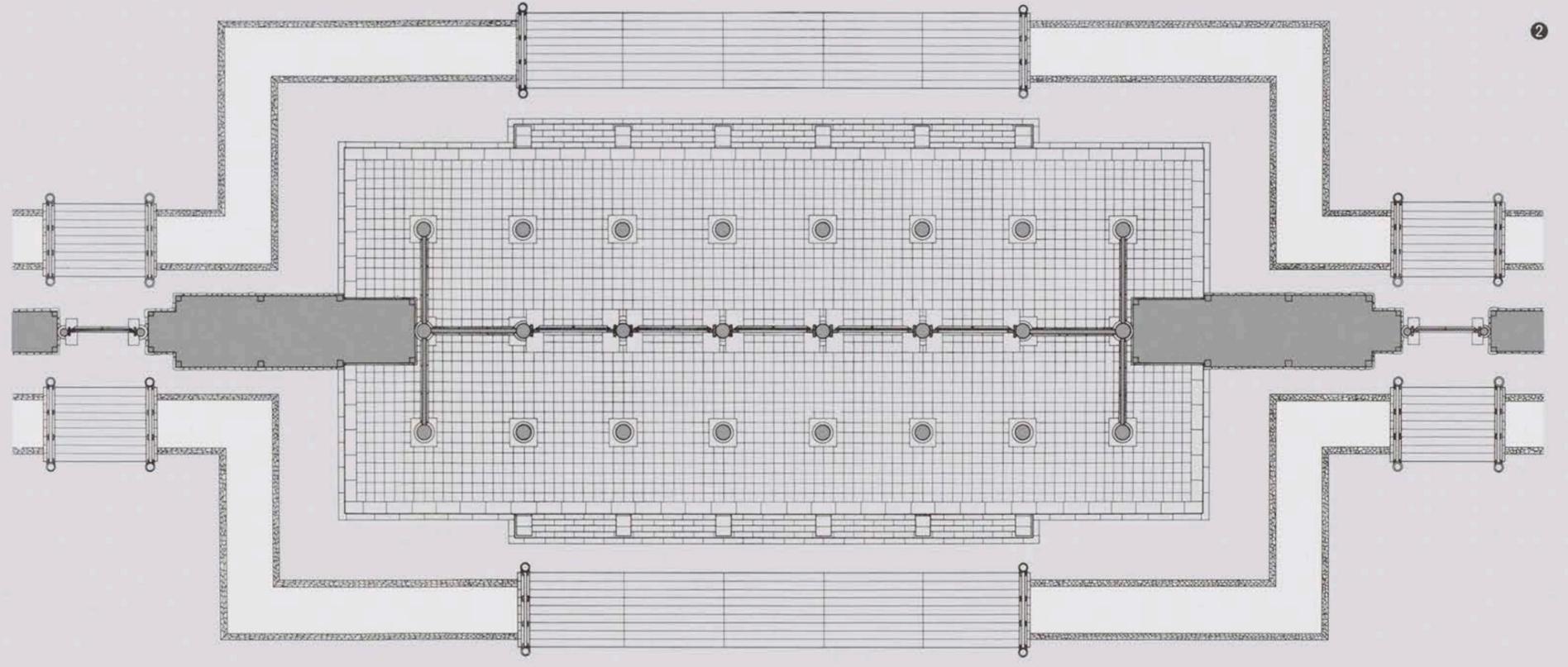
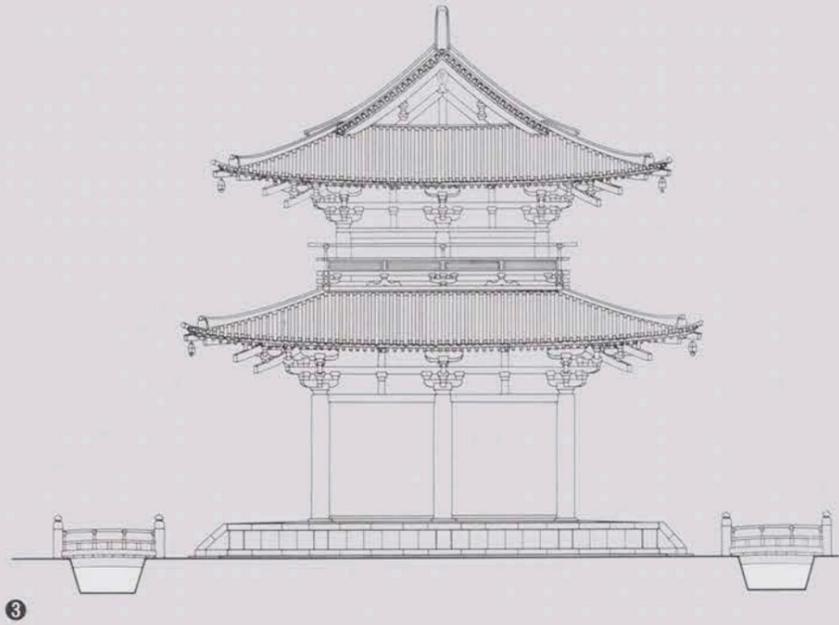
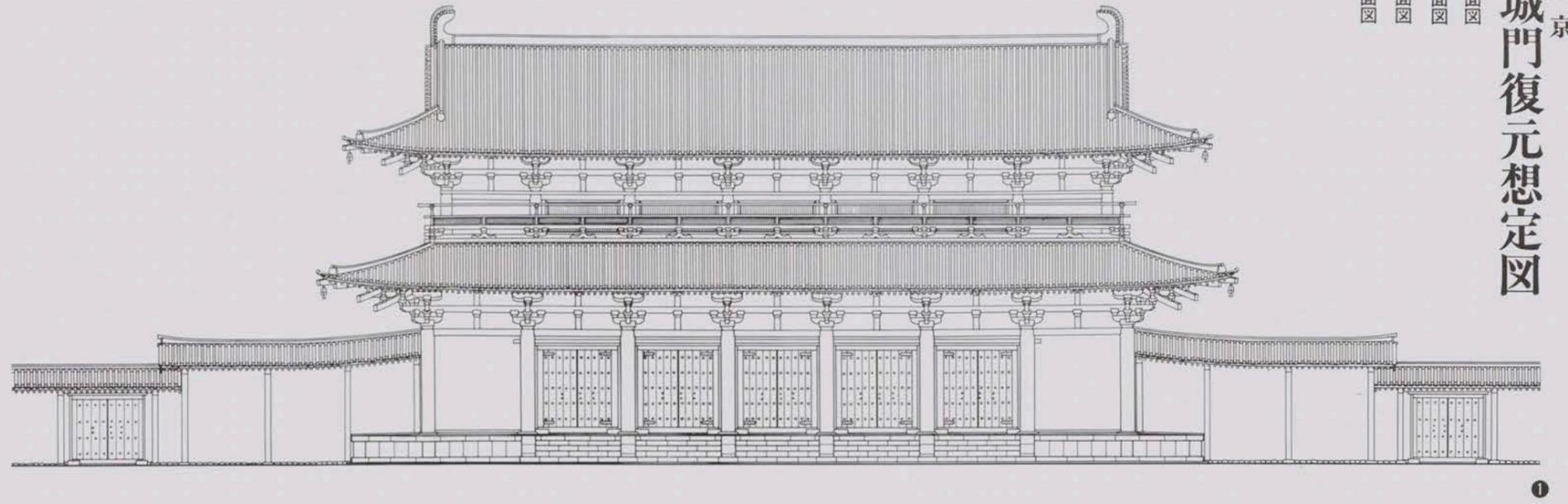
そこで推定のための手がかりを探した。朱雀門との関連である。平安京の朱雀門は「延喜式」に「二階七間戸五間」とあり、「伴大納言絵詞」(平安末期)では、間口七間、奥行二間、二重閣で入母屋造りと、その姿を明らかにしている。また、平城京の朱雀門については発掘調査により間口五間、奥行二間であることが判明し、羅城門についてもほぼ同規模と推定されている。これをもとに、文化庁、奈良国立文化財研究所の貴重な資料、朱雀門の復元図や模型等の取材を経て、次のように推定した。

まず、平城京の羅城門と朱雀門が同規模であることに鑑み、平安京の羅城門をその朱雀門と同様、二重閣七間として、考え方を統一させた。平城京のものより間口を二間広げた規模である。一説に二重閣九間というのは、創建当時は九間であったものが、度重なる再建て七間に縮小されたと考えられなくもない。

さて一間の長さであるが、これは平城京朱雀門にな

平安京  
羅城門復元想定図

- ① 正面図
- ② 平面図
- ③ 側面図
- ④ 断面図



らって十七尺とした。藤原京においても発掘調査により、南門(朱雀門)の位置に当たるや北門が十七尺と判明しており、古代の門の一間が不思議と十七尺に一致していることは興味深い。

つぎに高さであるが、当時は側柱の高さを柱間にほぼ等しくするのが通例であった。したがって、下層柱高は柱間と等しく十七尺(約五・一m)と定めた。また上層柱の長さを、奈良時代の重層門としては唯一の例である法隆寺中門の上・下層の比例にならい六・五尺(約二・二m)としていくと、基壇も含めた棟の高さは七十尺(約二二・二m)を超える。

### ③ 羅城門の復元想定図作成

羅城門の復元図作成を試みるにあたり、われわれはまず、京都市の文化財保護課を訪れた。しかし、平安京の発掘調査がほとんど行われていない現況では、その姿を探ることがきわめて難しく、復元図を作成することの困難さを知らされることになった。そこで、前述の平城京朱雀門の復元図、模範等を手がかりとし、これをもとに、羅城門の建築様式はその造営が平安京草創時であることから奈良時代後期の延長としてとらえ、同時代の現存建築物の構造・様式も参考にした。さらに異なった年代のいくつかの建築物から時代の流れによる様式の移り変わりをも考察した。しかし、前述のように限られた資料等からの推定のため、復元想定図としてまとめざるをえなかった。

なお、この考察にあたっては、文化財保護審議会専

柱、檼、檼、組物及び扉等の木部は丹塗り、小口は黄土塗りとし、格子部分は緑青塗り。壁は土壁であるが、仕上げは白土塗りとする。

### (5) 脇門

左右の羅城は、平城京朱雀門の発掘調査結果を参考に、規模を二段構えとし、左右に脇門を設けた。また羅城の内と外に各々十尺(約三・三m)幅の溝を設け、これには擬宝珠勾欄を持つ橋をかけた。

なお、これらのほかにも基壇、檼、妻等各部にわたりてきうるかぎりの考察を行い、復元想定図の作成を試みた。

このように羅城門を推定復元していくと、古代建築技術の粋を集めた平安京の壮大な正門が、時空を越えて甦ってくる。東・西両寺を翼に、重層入母屋造り、間口七間奥行二間戸五間、三手先組物を持ち、丹塗り、本瓦葺の屋根には鴟尾を置いた羅城門が、あたかも鳳凰のように華麗な姿を現わしてくるのである。

### ④ 復元

地上よりその姿を消しておよそ千年、平安京のシンボルともいえる羅城門をわれわれは復元想定図にもとづき現代に再現させることを考えてみた。このためには、材料の調達をはじめまだいくつかの困難な調査が残されていた。しかし、それらにも解決の糸口がみつかり、一応の結論を出すことができた。

### (1) 檼

羅城門が檼で造営されたことはほぼ間違いない。と



石山寺縁起絵巻 (写真 石山寺)

門委員・福田敏男先生から多大なご助言をいただいた。

### (1) 柱

下層部分の柱の径は、唐招提寺の柱のプロポーションを参考に、重層であることからやや太く二五尺(七十五cm)とした。形も唐招提寺にならって、頭部を少しすばませた。

### (2) 組物

組物は唐招提寺の支輪を持った三手先組物を参考とした。組物の高さとその張り出しのプロポーションは、時代が下るにつれて横長のものからやや縦長へと移ってゆくが、今回は海龍王寺五重小塔を参考に二対一とした。

### (3) 屋根・軒・鴟尾

屋根は本瓦玉縁葺とする。また、東・西両寺より創建当時のものと思われる緑釉瓦が出土していることから、羅城門についても緑釉瓦とした。屋根勾配は重層の法隆寺中門を参考とし、全体の釣り合いから下層で十分の四・七、上層で十分の四・七・八・〇としている。

軒反りは、当時の建築様式をよく保存している海龍王寺五重小塔を参考にし、全体としてはゆるやかな反りとした。軒の出は全体規模との釣り合いを考え、下層で十七尺(約五・一m)、上層で十六尺(約四・八m)とした。

鴟尾は、創建当時のままといわれる唐招提寺のものを参考にしている。

### (4) 彩色

ところが、現在日本に檼の天然林は数少なく、大木となると数えるほどしかない。まとまったものとしては、伊勢神宮の遷宮に使われる旧神宮備林が、木曾山中にあるだけといってよからう。但し、旧神宮備林でさえ樹齢は二百〜五百年である。このため、檼材をいかに調達するかが復元計画のポイントとなる。中でも柱に使えるような古木が、実際に国内で調達できるかどうか調査の大きなヤマとなった。調査に当たっては、

#### ▽樹種 檼

▽等級 芯持無節材

▽条件 赤味四面プレー加工

▽規格 a (下層柱用) 五・五m×七五〇mm×

七五〇mm

b (上層柱用) 二・五m×六〇〇mm×

六〇〇mm

の四項目を規準に、a、bとも各二十四本の調査に入った。

#### ア 木曾檼

木曾の天然檼の立木蓄材積は、蔽原、福島、上松、大滝、野尻、三殿、妻籠、坂下の八宮林置管内で合わせて約二百万立方があるが、ほとんどが二〜三百年生の立木で占められており、これらではa、bの規格に適合しない。ところが、この中に約千五百本ある孤樹(密集林の中にときおり点在し孤立している樹齢八百年以上の超大径木)の内、aの規格に適合するものを七本見つけることができた。野尻宮林署の天皇洞で三本、福島宮林署の油木沢で一本、大滝宮林署の瀬戸川で三本、都合七本である。赤味材に限定しなければ、さらに十五本

程度は調達できることも判明した。また、bの規格に適うものも大滝宮林署の管内で賄える見通しがあった。

ただし、これらの銘木はきわめて稀少価値が高く入手することが非常に困難であり、しかも、単価的にきわめて高額なものになる。ちなみに、運搬製材費等を含め、a規格で六百万円/立方尺、b規格で四百万円/立方尺程になるものと思われる。柱角材だけで、しめて約五億三千万円となる。

#### イ 集成柱

さらに集成柱の採用を検討してみた。すなわち、何本かの檜を寄木、接着する方法である。しかしこの場合、現在ある接着材で建物を支える柱を集成して、果たして長期間耐えうるものかどうか疑念が残る。結局、この問題が解決しない以上、集成柱の採用は断念すべきだとの結論に達した。

#### ウ 台湾檜

最後に、より現実的な方法として台湾檜の採用を検討した。台湾には未だ檜の天然林が亭々と聳えており、阿里山、羅東、竹東などの産地には、羅城門の柱角材として耐えうるものが十分存在していることがわかった。単価的にみても運搬・製材費を含め約百五十万円/立方尺と、国内の銘木に較べてはるかに廉価で入手できるのも魅力といえる。乱伐を防ぐための出荷制限はあるものの、総合的にみて台湾檜による造営がもっとも実際的であるとはいえよう。

#### (2) 瓦

緑釉瓦に適する土は焙器質とされ、現在では瀬戸の産土が最適といわれる。したがって、瓦はこの土を用

いて瀬戸の瓦窯で焼くこととする。

釉薬は質的には古代と大差ないが、酸化銅や炭酸銅のほかにバリウムやコバルトなどを添加して発色効果を高める。

#### (3) 鴉尾

鴉尾の高さはおよそ一・九尺あり、このような大きなものを入れる窯は限定される。この復元では、瀬戸より原土を運び、京都の東山区泉湧寺にある登り窯で焼くこととする。成形は上下二つ割りで行い、接続のうえ窯に入れる。

#### (4) 彩色

創建当時なるべく近い姿に再現させるため、また下地が木材であることから、彩色は古法に近い方法とした。丹塗りに相当する部分は鉛丹を、黄土塗り部分は天然の黄土を、緑青塗り部分はアフリカ産の孔雀石の粉末をそれぞれ顔料とし、膠で溶いて塗ることとする。

#### ■木造による復元

これまでの考察、調査をもとに工期、工事費を試算してみた。まず工期は、木材到着後およそ三カ年を要する。その期間の多くは、木材の加工、組立に費やされる。また工事費は、柱材に台湾檜を採用し、その他の部分には内地材を使うこととして、約二十二億円となる。この内、木材の調達費だけでほぼ六割を占めている。

#### ■コンクリート造による復元

実際に京都の市街地に復元する場合は、防火上の規制のため、耐火建築としなければならないだろう。幸いわれれば、この種の古建築様式の建物をいくつか

コンクリート造で手がけており、それらの技術を基礎として施工計画を立てた。

この場合、工期は二年強、工事費は約八億円と見積もった。

#### ⑤この作業を終えて

季刊大林「門」の巻頭に、歴史上名高い壮大華麗な門を復元してみよう……この試みの対象として、われわれは迷わず羅城門を選んだ。

平安京の象徴であったこの羅城門こそ、これまでわが国に実在した多くの門のうちでおそらく最もよく知られた最大級の門であろう。しかし、その姿は、遠く千年の歴史に埋もれ、今日、史料・文学伝説の中に、ありし日のおもかげをしのぶのみである。そして、過去数度にわたり部分的な発掘調査がなされたものの、確かな遺構は発掘されておらず、都市化の進展により今後大がかりな調査は困難であるといわれている。それだけに、この試みは、われわれにとつて、平安文化・建築技術の歴史をたずねることに加えて、未知のロマンを求めての、魅力あふれる作業であった。ともあれ、可能な限りの調査・考察を重ね、ここにみやびやかな羅城門の姿を想定再現することができたと思う。この間、門外漢のわれわれに対し、専門的な立場からご指導・お力添えをいただいた方々に、深く感謝申しあげたい。

## 参考文献

- 平安京地誌/岸元明 講談社  
建築学大系4日本建築史/建築学大系編集委員会 彰国社  
日本建築(下)/渋谷五郎・長尾勝馬共著 学芸出版社  
古代史発掘9/奈良国立文化財研究所 坪井清足・鈴木嘉吉編 講談社  
京都市埋蔵文化財年次報告一九七一/京都市文化観光局文化財保護課 鳥羽雅宮跡調査研究所  
奈良国立文化財研究所年報 昭和39年度平城宮発掘調査概要  
文化庁建造物研究室 平城京跡発掘調査部

- 日本の美術(古代の瓦)/稲垣晋也 至文堂  
日本建築史図集/日本建築学会 彰国社  
伝統のディテール/伝統のディテール研究会 彰国社  
大工道具の歴史/村松貞次郎 岩波書店  
宮大三代/西岡常一・青山茂 徳間書店